WRI NewsLetter No 80

1979年3月10日　戦争抵抗者インター日本部　大阪市あべの区旭町2-12-2

集会の案内問い合せなどは647-4089へどうぞ

都市の運動と現地

―松下竜一さんを囲む集りで―

F&K

〈豊前火力絶対阻止〉の松下竜一さんといえば、もう誰でも知っていると思うけど、佐賀関斗争の西尾勇さんといってもWRIの読者は、まだほとんど知らないんじゃないかしら。

私もついこの間まで、佐賀関斗争のことも西尾勇さんのことも知らなかった。

この西尾勇さんと松下竜一さんの結びつきの始まりは、実に劇的なシーンで始まる。

一九七四年六月、地元漁民の反対運動が全くない孤立した状況の中で、九電の豊前火力強行着工に対して、それでもそれを阻止すべく、松下さんら行動隊は、総勢20人。海岸に集まって、沖の測量船にむかって、くやしの涙をうかべてシュプレヒコールを叫んでいた……

『その時、見よ。

大漁旗をなびかせて一隻の漁船出現し、息を殺して見守るうちに船体を傾かせて疾走し、明神漁港突堤に接舷。船首より手を振るをみれば、大分県北海部郡佐賀関町の「大分新産都二期計画」八号地埋立を阻止させた漁民斗争の中心者西尾勇さんと上田耕三郎さんではないか。海路八時間の疾走で、支援に来てくれたのだ。歓声をあげて、支援学生らがバラバラと乗りこむのである・

一九七四年六月二六日真昼一時間にわたって明神の海に展開された海戦は、住民運動の戦史に残るみごとなものであった。十余

おしらせ

13日（火）PM六時半
不払い連びっくり講座
〈闇に葬り去られる原発労仂者被曝〉
（共同小屋）

15日（木）PM七時
「ウィール村の証言」
西独反原発斗争ドキュメント
（神戸エコカウンタースクール）

17日（土）PM六時半
「クルマ社会を支えるものは何か？―対論クルマ社会をめぐって」
（共同小屋）

14日（木）PM六時半
日高グループ定例会
（共同小屋）

守利乃奈加万乃阿以古登波

喫天尓乃里越

天皇・年頭の御歌〝原発が安全ならば、宮城（きゅうじょう）に、建てて民草照らさんとぞおもう

隻の測量船ことごとく沖に追い払い、更には五トン足らずの船をぶつけるが如く接触して二〇〇トンの鉄鋼船にことごとく乗り移り、捨石作業のクレーン・バケットに登って坐りこむなどしたため、ついに九州電力は午後一時、この日の海上作業を断念し中止指令を出さざるをえなかったのである。測量の赤旗すべて海中を漂い行き、午前中の測量行為もむなしくしてしまった。文字通り、ぼくらは実力阻止を果たしたのである…』

（五分の虫、一寸の魂」一九九～二〇〇頁から引用）

かくて西尾勇さん、上田耕三郎さん、そして豊前のなかま梶原得三郎さんの三人がとらわれて、いまに続く豊前沖海戦裁判が行われているのである。

☆ ☆ ☆

昨年11月6日、佐賀関漁協理事会席上で、その西尾さんが、組合長の片腕を日本刀できりおとす、という事件がおこった。

それは一五年前、西尾さんらの闘いでかちとった日鉱製錬所との協定―（一般に佐賀関方式として知られている①金銭による賠償を求めない。上浦湾内外五七万平方mのヘドロを浚渫して海をもとへと戻す。③県など行政機関の仲介・介入を一切排除した自主交渉）―が、いつのまにか浚渫区域の縮少変更、ごまかして行われていることが判った。

ところが、西尾さんが調べて行くと、なんと漁協の組合長が、日鉱とこっそり裏取引し、覚書まで取交して、協定の変更ができているということだった。

しかも事実が明らかになったのちも組合はどうすることもできず、うやむやのまゝもみ消されてしまうような成行きに及んで、ついに西尾さんが自らの身命をはって組合長を裁いたということなのである。

× × ×

松下さんの話は、とても直截で明せきだった。佐賀関の斗いの経過、その中での西尾さんの位置、人となり、そして西尾さんの今回のきわめてショッキングな行為、それが私たちにつきつけているものを、きっぱりと強く、悲しく重く、あきらかにした―そして…

話の冒頭で松下さんはいった。

西尾さんがこなくて、なぜこの私が来て佐賀関のことをしゃべるか。その理由は三つある。才一は、いま保釈中の身なので、居住地を放れにくい。才二に、二月末が漁協の理事選挙で、意を決して立候補した為、その運動にいそがしい。だがこの才一、才二の理由がなくても、彼はたぶんこなかっただろう。彼はこんな集会や都会の運動をあまり信用していない。彼の運動は、自主的主体的で自分に責任をもつものだと云える。（聞きまちがってたらごめんなさい）

× × ×

私たち―都市の運動が、西尾さんたちと、信用されたり、するような関係にない―ということはしご

本頁右にあるような、狂歌、マンガ、標語、
キャッチフレーズ・替歌。川柳・シンボル

など、よいものおもしろいもの 送って下さい。

く当りまえである。それにしても、そうはっきりと云われることは、私にとってぎょっとする問題だった。

そして、率直な「都市運動不信」という西尾さんの一語は、たしかに私の無意識層下にかくれている漠然とした感情としての「現地運動不信」を照し出すものだった。というより西尾さんの声はそのままの裏返しとして、私が気付かずふれたくないとしていた、私の内心の声でもあったゆえに、私をぎょっとさせた。

それは『現地と都市の運動のうめがたい隔離、しかもなお分ちがたい相関」などという語句や、『現地と都市をむすんで』などというきれいごとの表現でのカッコをつけている私たちの日常的状況を吹きとばすものだった。

そして、このように微妙なところであいまい化している相互関係の問題を、私たちが問題とせずふれないままで、都市と現地のちがいや、その交流連帯を語ることはできないことを、明らかに現地から断言したものだった。

× × ×

豊前海戦でいったんは埋立着工を阻止したものの、再び強行された着工に対して、松下さんたちはもはやどうしようもなかった。

そのとき、逮捕拘留されていた西尾さんは、こういったという。

「どうして次の日も闘わなかったのか。船がなかったらなぜ泳いでゆかないのか。途中で溺れて死んでもいい。俺は、そんな闘いがあとに続くと思って船を出した。

ほんとうに命をかけてキラものが二、三人おれば斗いは勝つ。負けない。」

このことで松下さんたちには、とてつもない重い荷物を背負うことがはじまった。

西尾さんたちとのそのような関係は、松下さんらがすゝんで求めたものではない。だが、そのような関係として西尾さんたちはやってきた。

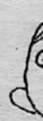
松下さんたち豊前の運動は、そののっぴきならぬものをうけとめて、より深まった新しい関係のなかで自らの力をも高めるものを生んだにちがいない。

西尾さんらの運動と、豊前の運動とはそれぞれが「現地」とはいえ、はっきりちがう部分があったように思われる。そのちがいをちがいとしながらの相互の信頼関係が生まれていく過程は、まだ私たちが未知の、これからの切実な課題だといわねばならない。

× × ×

西尾さんは一本づりの腕のいい漁師で、県下第2位で表彰されたこともある。漁師町で漁の出来ない人は尊敬されない。そして、私心のない西尾さんの斗いぶりは、漁師なら誰でも知っている。だから、

るり子はん 三月三日・Y君と共同生活に入りました。新居は堺市、いよいよはりきって活動中です。



直接行動4号・いそがしくて進行遅滞。発行・三月末がむずかしくなりそうです。すみません。

この西尾さんの事件をしった漁師たちの間で一週間のうちに三千七百もの保釈請求の署名が集まったという。（佐賀関町は人口約二万二千。一本釣漁とミカンと日鉱精錬所。日鉱従業員下請あわせ、三千五百人。漁協組合員一三五〇人）

それに対して松下さんたちの出したアピールへの反応はすこぶる微妙なものだった。カンパは割合に集まったが、保釈署名は意外に少なかった。周辺のなかまをのぞいて、数えるほどだったという。

つまり、それは「片腕を日本刀で切りおとした」という行為に関して現地と都市の意識の日常感覚における運動の大きな隔差をあらわすものであるにちがいない。

そして、松下さんはいう

「私の運動は、人間と人間のつながりではじまった。イデオロギーでの結びつきではない。人間関係の信頼のうえに運動はつくられていくものだと思う。そしていっしょにやってきた運動のなかでの西尾さんへの親頼感・親頼関係というものがはっきりとある。だから西尾さんがたとえ、人を殺してしまったとしても、私はすぐかけつけただろう。彼を支持し、救援することはきわめて自然で当然なことだった。」

「人を裁くということは、当然裁く側の重さを自らが負うことである。そのことによってはじめて『裁くこと』は人々にも是認される。西尾さんはその重みをはっきりとうけとめることで、組合長を裁いたのだと思う」

× × ×

私は、松下さんが西尾さんとの間に持っているような信頼関係・人間関係を西尾さんとの間には持っていない。

にもかかわらず、「草の根通信」を通じて松下さんたちから支持署名要請がきたとき、私の内部でちゅうちょするものはすこしもなかった。それは他でもない松下さんが云ってきているからとか、反公害運動の仲間だから―とか、多少はそれもあると思うけど、それだけでは決してない。（この私の立場と主体についてはイオム通信226でふれられているのでここでは省略する）

だが「支持する」というだけで―それはそうなのだとして署名やカンパをほんの少しとどけるということだけで―西尾さんや、自分の運動にとってことがすむのか、すまないのかの問題が残っている。（松下さんが語った人間関係―信頼関係は、まさにその問題を解くものとして出てきているのだろう。―時間がゆるせばもっとこまかな意味がきけたにちがいない）

云いかえるなら、自分にとって、ことはすんでいない、という所から、運動としての関係で現地と都市とがどのようにつながるかの問題の第一歩がはじまるといわねばならないだろう。（次号へつづく）

送金は振替　大阪32737　ウリジャパン　向井孝